

ユングの生涯とその科学

A Study of Carl Gustav Jung

1K03A053-2

小野 藍

指導教員

主査 内田直先生

副査 寒川恒夫先生

序論

序論では、ユングの紹介、本論文の狙い、ユングの略年表を記す。

本論文では、スイス出身の精神科医にして心理学者のカール・グスタフ・ユング(以下ではユングとする)についてまとめ、そこから見えてくる彼の考え方や思想を通してその科学のあり方を問うことを目的とする。

ユングは同じ精神科医のフロイトとともに、当時まだ十分に確立されていなかった精神医学の基礎を築いた人物。独自の考え方として分析心理学を創始し、『治癒は患者の中から自然に芽生えてくるべきもの』、『心理療法と分析は人間一人ひとりと同じほど多様である』という考え方のもとに、既成の枠組みにとらわれることなく患者を個別的に扱った。数多くの臨床経験と自身の研究活動の中で、無意識の深層に人類共通ともいえる普遍的な層が存在すると指摘し、それを“普遍的無意識”、そこから生まれてくる数々のイメージを“元型”と呼んだ。幼少の頃からスイスの田舎で美しい自然や生々しい風俗に親しみ、哲学や宗教学に造詣を深めた。自然科学と人文科学の両方に明るかったユングは精神治療にもその知識を存分に活かし、実践的経験とともに重んじた。洋の東西を問わず哲学、宗教学、神話学、さらには錬金術、超常現象にまで、既存の科学や常識にとらわれないあくなき研究と探求の心を向ける。個人の診療所や大学、精神医学関係の学会で活躍し、多くの論文、小論文の著作を残した。

第一章：精神医学以前のユング

ユングがまだ精神医学に出会う前の幼年時代、学童時代、学生時代についてまとめる。

早くからキリスト教や科学についての独自の考え方を持っていたユングは、内的な感受性が非常に発達しており、哲学や宗教に明るく、数々の印象的な夢や空想、神経症の経験などを経て、自己を確立し、既成の科学や常識にとらわれずに物事の本質を見極めようとする姿勢を身に着けていく。

第二章：精神医学活動

ユングの精神医学的活動、フロイトとの活動、無意識との対決、研究活動と“塔”についてまとめる。

精神科医としてのキャリアをスタートしたユングは、独自の方法と考え方をもって多くの臨床経験を積み、後年に確立する理論と思想の土台を作った。名実ともに分野の第一人者となりつつあったユングは、もう一人の精神医学の巨人ジークムント・フロイトと出会い、相互に多大なる影響を及ぼしあって精神医学・心理学のその後の発展に大きく貢献する。やがて、考え方の相違によりフロイトと決別したユングは、内的

な不確実感に襲われ、公職から退き、患者の治療法や自分の学問にも疑問を覚える。自身の無意識の情動を解き放って何とかその奥に答えを見つけ出したユングは、新しい気持ちで自分の研究活動と公職を再開する。同時期、自分で建築と増築を繰り返しながら作り上げていった“塔”に静かにこもって瞑想することを好んだ。

第三章：旅

ユングの、北アフリカ(アルジェリア・チュニジア)、アメリカ(プエブロ)、熱帯アフリカ(ケニヤ・ウガンダ)、エジプト、インドへの旅行体験をまとめる。

ユングはヨーロッパ以外の思想、神話、文化に早くから興味を持ち、積極的に学んでいた。自分の足で非ヨーロッパに立ち、直接に異文化の風俗と文化に触れることを望んでいたユングは、未開の地にも怖気づくことなく分け入り、多くのカルチャーショックとそれまでとは違った洞察を獲得する。

第四章：後年の活動と晩年

第二次世界大戦までの活動、第二次世界大戦と幻像、晩年についてまとめる。

第二次世界大戦前後のヨーロッパにあってもユングは変わらず公職と研究活動を精力的に続ける。一時病に倒れ、さまざまな幻像(はっきりした幻覚)に惑わされるが、やがてそれらを克服し、研究活動の結実として、主要な著作をこの時期に多く書き上げる。85歳で亡くなるまで、精力的な活動がとどまることはなかった。

第五章：最終考察

ユングの思想と考え方を通してその科学のあり方を考察する。

幼少時代から培われてきたユングの豊かな感受性と自然科学と人文科学の両面に優れた科学に対する視点は、物事を納得するまで追及する性格と信条を最大限に高め、その既成概念にとらわれぬ探究心は、精神医学の道を切り開く功績とともに、非科学、オカルト、神秘主義などの揶揄や誤解をも生み出した。その考え方や思想は枠組みにとらわれない分、広く複雑で難解であることには違いはない。ただし、ユングの探求はすべて精神医学と心理学の研究に結び付けて考え出されたものであり、彼自身は経験を重んじる現実主義者である。ユングは、自身の研究目的に合わなかった同時代に既存の科学にとらわれることなく、異端視され誤解されることをも覚悟の上で新しく自らの科学を切り開いていったのである。その意義と成果について、ユングの同時代はもちろん現代の科学も公正な判断を下すには至っていないのである。